

月例会報告 (2026 年 2 月 21 日)

イチョウの出現と日本への伝来

真柳 誠

すいぶん昔のことになるが、1997 年 9 月にオレゴン大学で開催された "Tools of Culture: Japan's Technological, Medical, and Intellectual Contacts in East Asia, 1100-1600" というシンポジウムで、私は「イチョウの出現と日本への伝来」という論文を報告したことがある。ただ内容に不足があり、雑誌等に未発表のまま私のウェブページに掲載していた。



ところが 2024 年の 10 月、名古屋市立栄小学校 6 年担任の教諭から突然の電話があった。6 年生の「探求学習」という授業でイチョウをテーマとし、その歴史を調べるグループが私の論文に注目したという。栄小学校は明治 5 年 (1872) 開校の第 13 義校に淵源し、150 年以上の歴史がある。校庭の中央には写真のように樹齢 100 年以上というイチョウの大木があり、多いときで 200 キロものギンナンが収穫されるところ。その校歌 2 番には「いち

ょうは高くそびえ立ち、緑の若い芽がもえる」と唱われる。それで私の論文が注目されたらしい。のち教諭から子ども達の疑問をメールでいただき、それには以下のように返信した。

○

真柳です。子ども達の質問に答えます

1 イチョウが生まれた時から現代までのイチョウの進化について。

→動植物の名は一般に種の名で呼びます。ネコ科にもトラ・ライオン・イエネコなどの種があり、バラ科にもリンゴ・ウメなどの種があります。したがって現在のイチョウという *Ginkgo biloba* 種ができてからは進化していません。

2 今のイチョウの形はおうぎ形なのですが、進化の途中で変わったのか。

→イチョウ科イチョウ属 *Ginkgo* の最古の化石種は 2 億 1 千 2 百万年前の *G. digitata* 種で、その化石の葉形は現在のイチョウ *G. biloba* 種と大差ありません。またイチョウの変種は 4 種、栽培品種は 90 種以上もあるようですが、葉形はおおむね同じといえます。ただし「おうぎ形」でも中心の割れ目が大きい「ズボン形」と、割れ目がないか小さい「スカート形」があり、前者が雄株、後者が雌株という俗説がありますがウソです。変種・品種の違いのようです。

3 現在自然のイチョウは中国のごく一部しかないらしいが中国のどこにあるのか。

→現在の安徽省宣城県が原産地と宋代に認識されていました。ただし現在の DNA も用いた研究では、浙江省天目山と四川省金佛山に野生の群生地があるとのこと。

4 真柳さんが知っていること。

→あの論文を書いた後、以下の発見がありました。中国の 1 万数千年前の遺跡から見つかった木工

品（打楽器？）の一部が、イチョウを材料としていたこと。

→鎌倉時代に京都東福寺などの建造用品を中国から運搬していた商船が韓国の全羅南道新安郡沖で1323年ころに沈没し、その積み荷からギンナンが発見されたこと。

○

いまの小学生にネット検索は当然のこととして、かれらはカラフルな以下のチラシをワードで作成し、学校の土間におき、アンケートもとったという。

①「私たちは皆さんにイチョウについて知ってほしい、という思いでもっと詳しくイチョウについて書いたチラシを土間に配置するのでぜひ見てください。隣に置いてあるアンケートにもご協力してくださるとうれしいです。アンケートが書けたら「イチョウの歴史アンケート」と書かれた封筒があるのでそこに入れてください」

②「イチョウが絶滅しそう！！皆さんイチョウが絶滅危惧種にされていることを知っていますか？実は、イチョウは「生きている化石」として国際自然保護連合のレッドリストの絶滅危惧種に指定されています。イチョウは2億年以上前に出現、しかし6000万年前に姿を消し日本でも100万年前に絶滅したので絶滅危惧種に指定されています。私はこのことについて世界中で解決しないといけないと思いました。皆さんはどう思いましたか？History group」

③「ドイツもイチョウに興味がある!? イチョウは日本と中国にしかない植物なのですが、ドイツには1982年から世界最大で世界最古のイチョウを保護するためのコミュニティ財団があります。ロゴマークにはイチョウのマークがあり、イチョウが絶滅危惧種という事も、人間がイチョウの生態系を変えてしまっていたということも考え、環境財団が生息環境を保護していることを表しています。すばらしいと思いませんか？イチョウがある国はもちろん、イチョウがない国がイチョウを保護してくれているんですよ。それほどイチョウが世界的に大切であり、重要だということです。みなさんもイチョウの見方を変えてみてください」



④「自然のイチョウは中国だけ！？みなさんの身の回りには、イチョウがたくさんあると思います。例えば校庭にある大イチョウや小イチョウもそうです。しかし栄小のイチョウは人によって植えられたものなので、人工のイチョウということになります。では自然のイチョウはどこにあるのでしょうか？実は自然のイチョウは、中国の浙江省というところにしかないと言われています。しかし今の段階では、浙江省の山奥にあるということはわかっているのですが、正式な場所はまだわからないそうです。みなさん自然のイチョウについてわかりましたか？みなさんも将来調べる機会があったら調べてみてください。History group」

⑤「あなたはイチョウについてしっていますか？こんにちは。私たちはHistory groupです！突然ですが皆さんはイチョウについてどんな印象をもちますか？皆さんおそらく「くさい」と回答しますよね！でもイチョウは世界で最古の木の一つとされ「生きた化石」とも言われているんです！そしてイチョウは2億年前から出現し、恐竜とともに大繁栄しました！私たちはこのようにイチョウの歴史について調べているのですが、以前茨城大学の真柳教授にお話をうかがいました。お話の中でも特に私たちが印象的だったのは、中国で世界最古のイチョウの打楽器が見つかったことです。こんな昔からイチョウを使った道具があるなんて驚きました！」

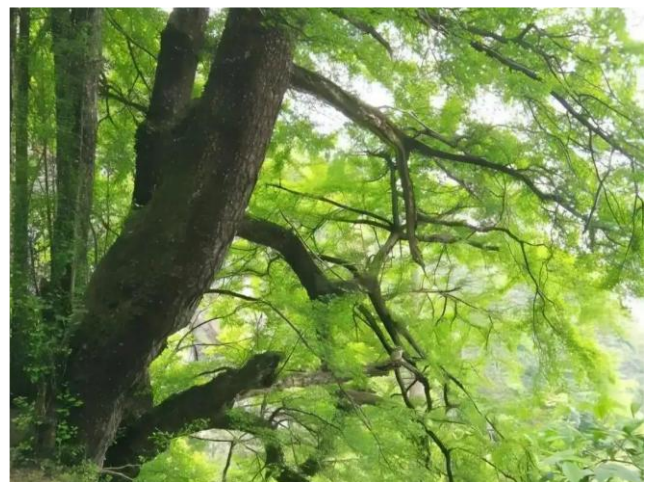
○

のち 11 月 14 日の午後 2 時から Zoom で子ども達に直接説明した。小学生に話をするのは初体験で、みな可愛くて嬉しかった。この件を『漢方の臨床』2025 年 1 月号の「新年の言葉」に書いたところ、矢数芳英先生から温知会でも話していただきたいとリクエストがあり、それが今回の発端となった。

中国の野生群生地

浙江大学生命科学院の趙雲鵬教授らの 20 年以上にわたる実地調査と DNA 研究によると、中国東部の浙江省天目山と西南部の四川省金仏山に野生の群生地がある（下の左図）。そうした地域は山岳奥地の斜面で、下の右写真（天目山）のように人間が植栽に関与した可能性が否定される。

むかし筑波大の生物科学系のイチョウ博士・堀輝三教授にうかがったが、日本ではタヌキの溜め



糞場でイチョウが発芽することもあるという。そのような野生動物の食性も関与し、天然イチョウは 100 万年以上生息し続けてきたのだろう。以下は拙論から抜粋する。

1 緒言

イチョウ綱 *Ginkgopsida* のイチョウ目 *Ginkgoales* の最古の化石科は 2 億 8 千 9 百万年前の *Trichopityaseae* である。イチョウ目イチョウ科 *Ginkgoaceae* 植物は 2 億 4 千 7 百万年前から世界的に繁栄していた。イチョウ科イチョウ属 *Ginkgo* の最古の化石種は 2 億 1 千 2 百万年前の *G. digitata* で、その葉形は現在のイチョウ種 *G. biloba* と大差ない。しかしイチョウ綱植物は 170 万年前の氷河でイチョウ目イチョウ科イチョウ属イチョウの 1 種を除き絶滅したという。それゆえイチョウは生きた化石と形容される。

イチョウの顕著な特徴は雌雄異株で、精子で生殖する。生命力が強く、接ぎ木や挿し木でも根づき、長命で巨木になると乳房状の突起をよく垂れ下げる。一方、種を植えてから最小で数十年、ふつうは 30～50 年ほど成長しないと結実しない。種子には特有の味覚があり、扇形の葉が黄葉すると黄金色に輝くなどの諸点で、イチョウの愛好家は多い。

さらにイチョウ葉成分の活性が 1960 年代にドイツで発見されて以来、化学・薬理の研究が進み、いまや世界の薬用植物の感すらある。

しかし当時はイチョウ史の研究が皆無に等しい。生きた化石、来日した Engelbert Kaempher が

1712 年に出版の"Amoenitatum exoticarum"で ginkyo (銀杏) を ginkgo と記し、それで学名の ginkgo になった、などの話しかない。これゆえ原産地や出現史にも定説がなかった。

そこで中国と日本の文献を検討し、イチョウの出現と日本への伝来史を解明することにした。なお本稿は現日本で植物をイチョウ、種子をギンナン (銀杏) と呼ぶのに従う。ただし現中国では植物を銀杏(Yinxing)、種子を白果(Baiguo)と呼び、両国では銀杏の文字が違う物を指すことを注意しておきたい。

2 出現記録

イチョウが宋代に出現したと初めて明言したのは『本草綱目』で、その銀杏条に「時珍曰。銀杏、宋初始著名」という。『綱目』は、イチョウの葉がアヒルのみずかきに似るので、もとは鴨脚の名だったといい、ギンナンが宋初に初めて都の汴京 (いまの開封市) に入貢されたとする根拠に、梅堯臣と欧陽修の詩を抜粋する。堯臣 (1003~60) と修 (1007~72、姓は欧陽) の詩に、銀杏などが出てくるのを集録した最初はたぶん『全芳備祖』(1225 頃成) だろう。

欧陽修はこう記した。江南 (いま安徽省宣城県) にある鴨脚の名も物も分からなかった時、都では貢献されたギンナンを貴んだ。李和文 (988~1038) が江南から鴨脚をとりよせて根づかせた。最初やっと 3、4 個が実ったので、立派な箱にいれて献上すると、宮中に識る人もなく、天子は百金で報酬した。年ひさしくして次第にふえ、今ではたわわに実っている。この由来を記し、後世に伝えるのも官のつとめだろう。

すると李和文が江南からイチョウを運ばせ汴京の屋敷や宮中に移植したのは、1010 年代から 1033 年の間となろう。植えてから 30 年で実がなる、と 1057 年に堯臣が示唆的にいうことから逆算した 1027 年も、この年代範囲に入る。たとえ和文が没した 1033 年に移植されたとしても、その 24 年後の 1057 年になってようやく大量に結実したのだから、はるばる運んできたイチョウは苗木・幼木か、よくて若木だっただろう。堯臣の口吻からすると、宣城から運んできた可能性が高い。

3 利用と名称の変化

食用：汴京の様子を描写した『東京夢華録』(1147 年) は、街頭で売られていた果実の筆頭に炒ったギンナンを挙げ、蒸し餅の上にギンナンなどの木の実をちりばめ、重陽の節句に贈ったと記す。

薬用：南宋の『紹興本草』(1159) にこうある。銀杏。宋の時世に出現した果実。...炒るか煮て食べ、生食すると害がある。各地に産出するが、宣州 (宣城) 産の大きなものがよい。...銀のような色で、形が小さな杏に似るので銀杏と名づけられた。葉が鴨の脚のようなので、鴨脚子ともいう。人々は生の外種皮をホクロに塗り、よい効験を得ている。過去の本草書には記載がないので、いま果部に収めた。紹興本草の新添品である。

元代では『日用本草』(1329 年初版) の銀杏条が初めて別名に白果を挙げるが、薬効はいわない。多食・生食やウナギとの合食、および小児への不可をいう。つまりイチョウの植物名は南宋から銀杏に変化し、鴨脚の名が文献記録から消滅する一方、種子を白果と呼ぶのが元代 14 世紀に出現し、明代 15 世紀から普及し始めた。

4 日本への伝来

鎌倉時代(1192～1333) 伝來說：大槻文彦『大言海』にこうある。今の中国で鴨脚を「やちやお」と発音してイチョウに似る。『下学集』(1444 成)など古辞書は銀杏に「イチャウ」の傍訓がある。「ぎんなん」に音便する前の「ぎんあん」は宋音なので、「いちやう」も宋音である。

室町の 15 世紀前期渡來說（真柳）：最初に記録した『下学集』は、銀杏にイチャウという呉音や漢音以外の音を振るので、書物上の文字ではなく、外来音で当時そう呼ばれた樹木がすでにあったと分かる。ただし異名の鴨脚には漢音でアフキヤクと振り、わざわざ葉形に由来するという語源を記した。ならば鴨脚の名は耳慣れない言葉だったに違いなく、ギンナン・イチョウに関する知識も当時まだ一般化していなかった。

銀杏を果実とし、樹木部分に記さなくなるのは『新撰類聚往來』（1492～1500 年）が最初。すると『下学集』の 1444 年、一般に結実していなかったので銀杏（イチャウ）を樹木名とした。そして『新撰類聚往來』の 15 世紀末頃になると結実が増え、銀杏（ギンアン）は果実名に変化したと考えるべきだろう。

韓国の全羅南道沖で 1323 年ころに日本行き商船が沈没し、その積み荷からギンナンが発見された。すると種子ギンナンの日本渡来は鎌倉末期まで遡るだろう。



一方、1435 年 10 月に足利持氏が常陸国佐竹郡の長倉義政を攻めた時に参集した諸将約 120 名の家紋を列記した記録の『羽継原合戦記（長倉追罰記）』に、「大石の源左衛門はいてうの木」とある。すると木曾義仲の後裔と称する関東の大石氏が「銀杏の木」（イチョウ紋）を家紋としていたので、室町時代すでに樹木としてのイチョウが普及していたとわかる。

5 まとめ

最初に知られた原産地はいまの安徽省宣城県だったらしい。これを北宋の 11 世紀前期に、李和文がいまの開封に移植して初めて人々に知られ、のち中国各地へ広まった。イチョウは 11 世紀に鴨脚と呼ばれ、ギンナンも鴨脚子だったが、すぐに銀杏の名称が普及した。南宋からはイチョウも銀杏と呼ばれる一方、ギンナンを白果と呼ぶのが 14 世紀に出現し、15 世紀から普及し始めた。

ギンナンは 14 世紀初に一般食品となり、イチョウ栽培の普及とほぼ並行していた。ギンナンは 14 世紀までに毒性、15 世紀末から 16 世紀初には内服や外用の効果が認識された。ギンナン外種皮やイチョウ葉の薬用も開発されたが、16 世紀末から消滅した。

日本への渡来は鎌倉時代説がこれまで有力だったが、イチョウを鴨脚の宋音と推定したことからの誤認と判断された。日本の記録は 15 世紀中期に樹木としての銀杏に始まり、15 世紀末から銀杏が果実に分類され始めるので、イチョウの結実特徴から室町時代のおよそ 15 世紀前期に一般化したと推定できる。